

## 第四十八回評論賞

「会津八一の短歌にみる平仮名表記について」

「コスモス」2025年8月号掲載

愛知  
塚原 明子

### 塚原明子の評論について

塚原明子さんの「会津八一の短歌にみる平仮名表記」は、短歌というわずか三十一音の定型詩の表現に、日本語の有する複雑な文字表記体系がどう影響するのかわというテーマに取り組んだ評論である。

塚原さんは本稿において、八一自身の言辭（『會津八一全歌集』「例言」）から、へいやくも日本語にて歌を詠まんほどのものが、音声を以て耳より聴取するに最も便利なるべき仮名書きを疎んずる風あるを見て、解しがたしとするものなり。を引用し、自身の立論の核としている。

その上で、八一が短歌に関わる以前は早稲田大学で英文学を学び、故郷新潟や早稲田高等学院・早稲田大学で英語を教えて

いた来歴に触れ、八一の英語話者という経験が、詩歌とはまず音声で耳から聞き取るものという考えを補強したと述べる。また卒業論文にするほど傾倒したキーツの詩や、多読したという漢籍について、〈外国の詩歌に深く触れた経験がある人ならではの音読・韻律への優れた感性が、短歌における平仮名表記を徹底させた〉と記し、それらを平仮名表記の成立を支える契機として位置付けている。

また平仮名の有する視覚的効果についての言及も興味深く、〈平仮名は漢字に比べて文字の周りに余白が多く、線と線との間がひらいていて開放感がある。表記した際に、黒白を分ける輪郭線が曲線であることも相まって、風や雲など形が明確でないものを想起させやすい。〉と記し、書家でもあった八一の造形芸術と文字表記に架橋する視点を明快に論じている。

塚原さんはさらに〈そして、平仮名が持つこのやわらかな輪郭は、会津八一の歌において、彼が「酷愛」してやまなかった奈良の風物、なかでも仏像という人型のやわらかな輪郭を表現する際に、真骨頂を発揮している。〉と考察する。奈良仏教美術に魅了された書家としての八一の側面を踏まえ、仏像のやわらかな輪郭と平仮名表記の線の性質を対応させることで、八一の表記選択は、美術史的感性と結びついていることを丁寧に示唆している。

評論掉尾、塚原さんは、〈A Iが歌を詠い、ソフトが音を三つの文字体系に自在に変換してしまう現代〉に言及し、そんな



塚原 明子

### 感想

評論など書けるだろうかと危ぶみつつ、以前から心惹かれていた会津八一の短歌における平仮名表記について書かせていただきました。受賞するなど露思わず、望外の喜びです。「コスモス」に縁する契機となりました今はない富山支部高岡勉強会の皆様、日頃、様々な励ましをいただいている愛知支部の皆様にご感謝申し上げます。

### 略歴

一九六八年 富山県高岡市生まれ  
二〇〇六年 コスモス短歌会入会

### 《選考過程》

選者団に推薦を求め、高野・影山・桑原・狩野・小島ゆ・木畑・大松・田宮・津金・福士・藤野・風間・田中・水上比・鈴木竹・原賀・水上美・大野・松尾・鈴木千・小島な・小田部・斉藤の各氏から回答があった。被推

薦者は五篇であった。

推薦の内訳（一人1点）は、塚原明子「会津八一の短歌にみる平仮名表記について」8点、瀬尾恵「さびしさと重なりあうもの―小島ゆかり論」4点、山下佐保「〈対句〉で読む小島ゆかりと桑原正紀」2点、海老原光子

「老いの歌 短歌の力」2点、三沢左右「抽象の効果―「時間」「花」「死」…抽象を生かす―」1点、であった。これを二月十四日、編集部で検討した結果、塚原明子の受賞が決まった。